

入賞

## 福島を行動することで 感じたい、考えたい

追手門学院大手前中学校 1年

タケノベ ミオ  
**竹延 美桜**

“東日本大震災と福島の関係”を多くの中学生は知らない。ただ、地震の映像を見るたびに私に何かできないかと思う。しかし、いつも何もできない。そして、今は考えることすら諦めている。関心があろうがなかろうが行動しないのだから何も得ることができない。

わたしは、自分が嫌いになりたくないから行動を起こして福島をリアルに知っていきたい。私の提案は、中学の義務教育に「リアル防災」という学習科目を創ることだ。日本は、これからも地震をはじめ多くの天災に向き合って生きていくしかなく、防災の知識は不可欠だ。しかし、教科書や避難訓練程度でのリアル感のない学びでは、到底、まさかの事態がおこっても対応はできないだろう。そこで、修学旅行という思い出づくりとは一線を画した学習科目「リアル防災」を提案し、その学習の最後には3日間ほどの福島でのフィールドワークを体験したいと考えている。極力、東日本大震災の当日と同じ状況で体験したい。たとえば、時期は3月、そして場所は、復興整備を終えた津波が実際にきた場所でキャンプを張る。まず、＜1日目＞の日中は、津波がきたことを想定して、防災訓練をする、どう逃げどこへ避難するのかを自分たちで考え、実際に避難する。夜はキャンプファイヤーをして、満天の星の下で死者を弔う。自分たちの同世代の被災者の力もかりて、少数グループごとにその体験を聞く。もしも、この暗闇の中で地震がおき、津波がきたらどうするのか、逃げ遅れる人を救うのか、そうした生きたディスカッション

は、自分が大人になっていく中で様々な困難に対して有効に作用するだろうから。そして、＜2日目＞は、メモリアルとして残る一本や防災センターそして廃炉作業の進む原発をこの目で見る。いきなりこれを1日目にしないのは、自分自身で考えること、行動を起こすことが大切だと思うから、偏見を持ちたくないからだ。そして、最後の＜3日目＞は、震災から10年以上たった中で復興した町・産業、そして新たに芽生えた事業・絆、また一向に復興の進まない部分、残しておくべき福島の伝統を自分の目で確かめたい。そして何ができるのかを福島の場所にながら、言葉にして残したい。それは感想文ではなく、福島を感じた自分の将来への誓いでもある。そうした学習にこそ、福島の惨劇と復興が記憶にすらない私たちも、脳と心に刻みこめるのではないだろうか。今を生かされている自分は、将来、何をしたいのだろうと考え尽くしたい。

最後に、私は父からいつも、福島の思い出をよく聞く。父は大学時代、グリーンフィールド富岡という場所で応援部の合宿をしていたようだ。澄み渡った空気、温かい人柄、おいしい食べ物。広島出身の父は、納豆が嫌いだったが、福島で食べられるようになった、また、合宿中に曾祖父が亡くなったと電話が入り、富岡駅から広島まで帰り、別れを告げるとすぐ福島に戻った。早く親を亡くした父にとって曾祖父は特別なものだった。だから、その心の穴を埋めることができるのは、クラブの仲間と福島の温かい土地だったと何度も話す。父は起業家として一流で、その行動力にはいつも驚かされる。自分のことは仕事のことしか話さず、こうした自分の過去の思い出を話す人間ではない。だから、福島だけは特別なことがわかる。行くべきだ私は、そして私たちは「福島」でリアルに行動を起こすべきだ。